

# 『新フランス評論』創刊百周年 ——アンドレ・ジッド関連の出版・行事を中心に——

吉井亮雄

1909年2月にアンドレ・ジッドやジャン・シュランベルジェ、ジャック・コポーら6名の作家が『新フランス評論』を創刊して今年でちょうど百年になる。周知のように同誌は、党派性の排除や外国文学の積極的な受容・紹介を標榜して広く国内外に優れた寄稿者を求め、とりわけ兩次大戦間はフランスのみならず汎欧的にも大きな影響力を誇った。1911年設立の単行書出版部門、それに発して第1次大戦後に急速に成長・発展したガリマール出版をこれと一体の文化的運動と位置づければ、まさに同誌は20世紀のフランス文学を主導したといってもけっして過言ではない。その一世紀の歩みを称えて、フランスでは昨年末から今春にかけてジッド関連を中心に出版や記念行事が相次ぎ、また今後もコロックなどいくつかの催しが予定されている。本稿ではこれらの主だったところを紹介し、あわせて当該分野の研究動向を概観したい。

## 作品集（プレイアッド新版）

ジッド関連の出版のなかで最も注目を集めたのは、なんといっても本年3月に公刊されたプレイアッド新版『小説・物語、詩作品と劇作品』2巻本であろう<sup>1)</sup>。旧版『小説・物語・ソチと詩作品』（1958年）は長らく基本的な参照対象であったが、研究の進展につれて種々の不備が指摘されるようになっていた。新版は後継の学術版として10年ほど前から準備が進められていたもので、すでに叢書入りしていた『日記』新版（1996-97年）、『批評的エッセー』（1999年）、『回想録・旅行記』（2001年）につづく同版の完成によって、ジッドの著作活動の全容がようやく研究現状を反映するかたちで提示されたのである。編纂の陣頭指揮にあたったのは、上記『批評的エッセー』『回想録・旅行記』の2巻を手がけ、今やクロード・マルタンに比肩するジッド研究の泰斗となったピエール・マッソン。協力者にはアラン・ゲーレ、ジャン・クロード、デヴィッド・ウォーカー、ジャン＝ミシェル・ヴィットマン、セリーヌ・デランと、ベテラン・中堅をとりまぜたいずれも第一線の研究者が名をつらね、おのおの得意分野に応じて個別作品の校訂と解題・付注を担当している。総計3,000頁をこす大冊だけに細かな検討はまたの機会に譲り、ここではごく大まかに新版の構成と特長を述べておこう。

第1巻では、マッソンの序文（簡にして要をえた見事な解説である）とジッド年譜（1869-1914年分）、編纂・校訂の方針説明、書簡集一覧につづき、各作品のテキストが刊行順に（後述のように類縁性の高い2作品を合本形式にする場合をのぞく）並べられている。この後、やはり

作品毎にそれぞれ解題，個別書誌，校本にかんするノート，注・異文が付される。第2巻では，冒頭のジッド年譜（1917-1951年分），再掲の書簡集一覧につづき，第1巻同様，作品テキストと各種のアパラ・クリティックが配され，巻末には総合的な書誌が添えられている。

旧版と比べて内容面で最も大きく異なる点は創作的著作を網羅していることである。旧版がジッドの処女作『アンドレ・ワルテルの手記』および第3作『アンドレ・ワルテルの詩』を収めなかったことは，すでに出版当初から根拠不明の排除と批判されていたが，新版は両作品を合本のかたちで，つまり1930年のクレス社「決定版」に倣い『アンドレ・ワルテル，手記と詩』の題で第1巻の最初に採録・提示している。また劇作品は旧版では採録の対象外であったが，ここでは『ピロクテテス』『カンダウレス王』『サウル』『バテシバ』『オイディプス』『ペルセポネ／プロセルピナ』『ロベールあるいは一般の利益』『13本目の木』や『法王庁の抜け穴』笑劇版に未完の2篇『アヤックス』『帰宅』をくわえた計11篇すべてが収められた<sup>2)</sup>。その他には，ジッドが自ら重要性を強調しつつけた同性愛弁護の書『コリドン』，また大作の創作経緯を証言するばかりか，現実とフィクションとの架橋とも呼びうる『贖金つかいの日記』などが新規に収録されている。さらに補遺では，作家の没後に発見・刊行された『ミシュルの物語』『気難しき人』も読むことができる。以上のように創作テキストを対象とした本新版は，その網羅性においては難ずべき点が見あたらない。

「底本」の選択についても触れておこう。まずは1932-39年刊のNRF版『アンドレ・ジッド全集』（第15巻で中断）の収録作品について——。少なからぬ誤植の存在をはじめ，同全集で提示されたテキストは必ずしも精密なものとは呼びたいが，にもかかわらず結果的にはほとんど全ての作品について，作家自身が確かに校閲したと実証しうる最後の版となった。こういった事情を尊重して『贖金つかい』『贖金つかいの日記』までの作品は，『法王庁の抜け穴』など二，三の例外をのぞき（ただしこれらの底本も全集版との異同はごく少数），いずれもが適宜必要な修正を施しつつ基本的には同版を底本としている。いっぽう『女の学校』3部作や『オイディプス』『新しき糧』『テセウス』など，全集の刊行中断によってその収録からは漏れた1929年以降の10作品の場合は，各々の出版経緯に応じて底本が決定されている。

だが底本の如何にかかわらず，解題の執筆にあたっては自筆原稿類の調査にもとづき作品の成立過程を重視するという方針が採られた。もちろんこれは近年の生成研究の流れをうけたもので，旧版には欠けていた視点である。ただし実際の異文収録となると，紙幅の制限から刊本の異文もふくめ重要度の高いものだけに絞られている（『放蕩息子の帰宅』とすべての劇作品を担当したジャン・クロードからの私信によれば，当初から版元ガリマールの指示で採録する異文をかなり選別していたが，原稿提出後にもさらに相当数を削るように求められたとのこと）。また自筆原稿が依然として個人蔵である『パリュード』や，2001年に膨大なアヴァン＝テキスト群がパリ国立図書館の所蔵となったものの，未だ予備調査の段階にある『贖金つかい』などについては，断片稿をのぞけば実質的調査はおこなわれておらず，具体的なところは今後委ねざるをえない。以上のように，本書自体は総体的に見て完成度の高い学術版ではあるが，あくまでも厳密な意味での校訂版作品集ではない。今後も個別校訂版の継続的刊行が望まれる所以である。

これほどの大きな成果にたいし瑕瑾を言挙げするのは本意ではないが、むしろ敬意の証として気づいたところをいくつか書きとめておこう——。まず『パリュード』の校訂者が同作の部分的初出の出典として、『ル・レヴェイユ』(1894年10月号)、『ラ・ルヴェユ・ブランシュ』(95年1月号)の2誌のみを掲げるのは明らかな不備(第1巻1300頁)。実際にはこの他、すでにジャック・コトナンのジッド書誌が指摘していた『パーン誌フランス版補遺』(95年6-7月号)、また筆者が同定・確認した『ル・クーリエ・ソシアル』(94年12月16-31日号)および『ルーヴル・ソシアル』(95年5月号)がある<sup>3)</sup>。また解題・付注にはところどころ日付にかんする小さな誤りが見うけられるが、そのひとつを挙げれば『放蕩息子の帰宅』の解題が引用するクリスチアン・ベック宛ジッド書簡(第1巻1409頁)の日付は1907年7月8日ではなく同月2日である。さらに書誌についても一言——。研究言説の重要度にかんしては必ずしも万人の判断が一致するわけではないし、とりわけ雑誌掲載論文の場合には数の多さからいっても取捨選択は避けがたい。したがって筆者が採られてしかるべきと考える論文が書誌のなかに見あたらぬとしても、それは致し方ないことである。しかしながら『サウル』や『イザベル』『贖金つかいの日記』の個別書誌が、いずれも雑誌掲載論文しか採らず、それなりの実質を伴う単行研究書を一冊も挙げていないのはやはり選別に均衡を欠くのではあるまいか<sup>4)</sup>。

## 書簡集

昨年暮れ、新興の出版社クルン・リリックからジャン・ロワイエールとの往復書簡集が刊行された<sup>5)</sup>。ロワイエールはマラルメ系譜の象徴派詩人だが、創作者としてよりもむしろ雑誌主宰者として20世紀前半の文学史にその名をとどめる。とりわけ彼が1906年に創刊した『ラ・ファランジュ』は、ポール・フォール主宰の『詩と散文』(1905-1914年)とならび、象徴主義的価値の継承を謳った最後の文芸誌と呼びうるもので、1914年の終刊まで執筆陣にはヴェラーレンやレニエ、モレアス、ギュスターヴ・カン、レミ・ド・ゲールモンら、またアポリネール、アルベール・チボーデ、アンリ・フランク、トリスタン・クリングゾル、ジュリアン・オクセ、ジョン＝アントワヌ・ノーら数多の詩人・批評家が加わった。すでに象徴主義の影響を脱していたジッドは、途中自らが『新フランス評論』を創刊したのも相俟って、ロワイエールからの寄稿要請に応ずることは少なかったが(1911年5月号の「4つのシャンソン」が唯一の寄稿)、彼とはほぼ良好な関係を保ちつづけた。その後ロワイエールは1926年、著名な古書店主オーギュスト・ブレゾを版元として『ル・マニユクリ・オートグラフ』(隔月刊、のち季刊)を創刊する。新雑誌はその名の示すとおり、作家・芸術家のテキストを自筆原稿のファクシミリ複製で掲載するという方針を売り物とした。ロワイエールは1933年の同誌終刊までに「『地の糧』新版のための未刊の序文」をはじめ、5度にわたってジッドから原稿を委ねられたが、その間、作家とブレゾとの仲介役として『カンダウレス王』などいくつかの自筆原稿の譲渡・売買にも関与している。

このたび出版された書簡集は、ヴァンサン・ゴジビュの編纂により、パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫所蔵を中心に、1907年から34年までに交わされた計53通(ジッド書簡19通、ロワイエール書簡34通)を活字化したもの。大半は未刊だっただけに、これが公になったことは

慶賀すべきだが、残念ながら学術版としての仕上がりは芳しくない。なによりも大きな不備は、ジッド書簡を主に収録漏れが多いことだ。筆者の承知するかぎり、両者の交わした書簡はこれまでに少なくとも65通（ジッド書簡29通，ロワイエール書簡36通）の存在が確認されており、結果的には現存コーパスの約2割が採録されていないのである。個人蔵の書簡はさておいても、『ジッド友の会会報』や競売記録の参照，またアルスナル図書館やテキサス大学オースチン校・人文研究センターなど公的機関での調査が不十分であることは否めまい<sup>6)</sup>。

また校訂・付注にも全幅の信頼はおきがたい。ロワイエール関係はともかく，ジッドにかんする実証面でのゴジビュの学力不足は明白である。以下に主な誤りを指摘しておこう——。まず収録書簡中3通に日付の誤りが認められる。すなわち書簡4と6は，1908年10月21日付および25日付とされているが，これらはいずれも12月の誤記（この修正につれて書簡の配列も変わる），また書簡31の1913年11月15日は同月25日の誤記である。付言すれば，ジッドの筆になる書簡21の見出しをロワイエール書簡と記すのはあまりにも粗雑なミス。また本文ばかりか付注にも不用意な記述が少なくない。たとえば書簡8（1909年7月13日付）においてゴジビュは，ロワイエールからの寄稿要請を断る理由としてジッドが挙げた「ある非常に重要な仕事」を『イザベル』のことと推測するが，これは明らかに『コリドン』執筆との取り違い。書簡30（1913年1月29日付）でジッドが贈呈を告げているのも『放蕩息子の帰宅』の私家版初版ではなく，同年初頭に新フランス評論出版から出た第3版（刷了は前年2月）である。さらに書簡49（1930年2月1日付）でロワイエールが献本にたいし礼を述べるのは，あるいはゴジビュのいうように『ロベール』のことかも知れないが，ロワイエール宛自筆献辞入り刊本と，それに添えられた1930年のジッド書簡（本書では収録漏れ）の存在が確認されている評論集『偏見なき精神』の蓋然性もまた否定できない，等々。いっぽう同時代の関連資料を集めた補遺はなかなか充実しており相応の評価に値しよう。

次いで本年2月，ガリマールから叢書「レ・カイエ・ド・ラ・エヌ・エル・エフ」の一冊（および別表紙で「カイエ・アンドレ・ジッド」第20巻）として公刊されたのが，待望久しかった『ジッド＝ヴァレリー往復書簡集』の増補改訂新版である<sup>7)</sup>。周知のように1955年刊の旧版は，学者肌の作家ロベール・マレがヴァレリー没後ジッドの委託を受けて編んだもので，以来半世紀以上にわたり第一級の基本文献として活用されてきた。とりわけその解題や付注の多くは，先行のジッド＝ジャム，ジッド＝クロード両往復書簡集の編纂作業をつうじてマレが獲得した博い実証的知見にもとづくだけあって，今なお参照に値する貴重な情報源である。しかしながら書誌の作成と同じく事の性質上，書簡集の作成に完璧・無謬ということはまずありえない。調査が進むにつれ，同版にもまた未収録分の少なくないことが分かってきたのである。新版はこの欠落を埋めるべく企図されたもので，ジッド書簡の研究ではクロード・マルタンと並ぶ第一人者ピーター・フォーセットが編纂・校訂の任にあたった。彼が新たに提示したコーパスは未刊の176通をくわえた計638通。網羅性が高く，現時点では十分に満足のいく成果といえよう。フォーセットはすでにパスカル・メルシエと共同で，ジッドとヴァレリーが各々ピエール・ルイスと交わした膨大な書簡群を1,700頁近い大冊『三声の書簡集』（2004年）にまとめている

が、本書の出版によって資料的にも均整のとれた「三声」の全貌が公になったわけである。

当然のことながら増補分によって書簡交換の具体相はいっそう鮮明なものとなった。なかでもとりわけ注目に値するのは、ヴァレリーがジッドの同性愛を承知した時期の特定であろう。従来は1907年7月のアンリ・ゲオン宛ジッド書簡の記述から、その時点でアンドレ・ルベイをつうじて事実を認識したと考えられていた。だが実際にはヴァレリーはルベイの情報にたいし半信半疑であり、無関心のゆえか否かは定かでないが、やがて一件は彼の意識から遠のいてしまう。こうしてジッドの「生き方と生活習慣のことは何も知らずにいる」状態が長らく続いたのち、1923年10月になってようやくジッド自身の口から、『一粒の麦もし死なずば』『コリドン』両著公刊の意志とともに、同性愛にかんする決定的な告白を聞かされたのである<sup>8)</sup>。さらに興味ぶかいことに、この話題は以後二度とふたりの筆に上ることはない。秘事はふたたび「ノン＝ディ」の領域へと追いやられてしまうのである。

いっぽう既刊分にかんして特記すべきは、日付決定・推定が旧版のそれとは異なるものが相当数にのぼることだ。全462通中なんと190を越す日付が修正されているのである。その4割ほどは消印の精確な読み取り（あるいは書状中の曜日記述との照合）によるもので、異同の幅も多くは1日から数日までとさほど大きくはないが、全体のなかには書簡の配列を動かし細部の事実の書き換えを強いるものもある。いずれにせよ、日々形成され時を刻印される資料体にとってはきわめて重要な修正である。既存文献の参照・引用にあたっては、今後はつねにこの新版を考慮に入れた再検証が前提となろう。なお付注について一言すれば、版元からの紙幅制限があつてのことだろう、その数量は必要最小限にとどまるものの、どの記述も精度が高い。さすがにプロの仕事という印象を覚えるが、個人的な情報交換をつうじてフォーセットの博識をよく知るだけに、筆者としては細部の理解を助ける補足的説明がもう少し多ければさらに便利だったろうと、つい望蜀の念に駆られてしまう<sup>9)</sup>。

### 証言録・研究書・書誌

まずは、本年2月にガリマールから出版されたカトリーヌ・ジッド『対談、2002-2003年』<sup>10)</sup>の紹介から――。断るまでもなくカトリーヌは、妻マドレーヌとは「白い結婚」だったジッドが1923年4月、親友ヴァン・リセルベルグ夫妻の娘エリザベートとの間にもうけた唯一の実子で、マドレーヌの没後に彼の養子となった人物。彼女は10年ほど前からスイス人のジッド研究者ペーター・シュニデルと婚姻関係にあるが、この夫の提案のもと、俳優で監督のジャン＝ピエール・プレヴォが2002年から翌年にかけて記録フィルム『アンドレ・ジッド、家族のつながり』（未公開）を撮影していた。本書はその未編集分の一部を活字化したものである。

プレヴォら4名を相手にした6つの対談は、ジッド父娘や親族、友人たち（マルタン・デュ・ガール、シュランベルジェ、ピエール・エルバール、ロベール・ルベックら）の生身の姿を伝え、まさに一読巻を措く能わず。たとえば、汽車旅行のさい『ボヴァリー夫人』を読もうとした少女カトリーヌに、「お前が車中で『ボヴァリー夫人』を読んでいるのを見られるのは宜しからぬ」（56頁）と忠告する意外に保守的なジッドの一面。あるいは、ふたり揃っての観劇のさいに

彼が見せる微妙な態度——「いいかい、あそこにモーリアックがいるので挨拶して来よう。だが彼にお前を紹介するのが賢い手だろうか、多分そうではあるまい。だから私は会ってくるが、お前はそのまま、ただ座っていればいいさ」(27頁)。さらには、実の父親はジッドだという噂が立ったため、彼が意を決して真実を告げたときの娘の反応——「彼が私にどんなふうにしたかは今はもうよく分かりません、だって何の反応も示さないように気を張りつめていましたからね。どんな感情であっても彼には悟られたくなかったのです」(25頁)等々、興味ぶかい逸話が満載である。補遺にはカトリーヌ誕生にまつわる未刊書簡16通が添えられるが、これもまた当事者たちが抱いた不安や期待、幼子への細やかな愛情を証する貴重な資料である。

ジッド研究書としては、昨年末に出たマルティヌ・サガルトと上述のペーター・シュニデールによる共著書『アンドレ・ジッド、<sup>なま</sup>生のエクリチュール』を挙げておこう<sup>11)</sup>。同書自体の内容は、『日記』『かくあれかし』と『ソヴィエト旅行記』『同・修正』という対照的な2つの作品群をサンプルとしたジッド生成研究への手引きと呼びうるものである。だがそれにもまして注目すべきは、本体をなすのが両作品群の草稿・媒体の画像だけではなく、音楽や動画(ジッド女史の証言など)の抜粋を豊富に収録したDVD版であることだ。研究面で有意義なばかりか、見たり聴いたりと大いに楽しめる好企画である。すでにアラン・グーレとパスカル・メルシエによって『法王庁の抜け穴』生成批評版(2001年)がCDロムのかたちで作成されているが<sup>12)</sup>、今後はこのような電子媒体での試みが増えてくるであろう。

一般読者向けには『ル・マガジヌ・リテール』誌3月号がジッドの「ドシエ」を組んでいる<sup>13)</sup>。収められた10本ほどの小論考(多くが大判の見開き2頁)に出来不出来はあるが、アラン・グーレやピエール・マッソン、ピエール・ラシャスらのそれはさすがに堅実な内容である。いっぽう無署名の書誌は粗略と言うほかない。雑誌の性格上、情報が選別的になるのは致し方ない。だがジッドの全生涯をカバーする伝記がフランス語では未だ存在しないとしても、アラン・シェリダンの英語著書『アンドレ・ジッド、現在時の一生』<sup>14)</sup>を「最も注目すべき伝記」と呼ぶのは明らかに過大な評価である(じじつ第一線の研究者が同書に言及することはむしろ稀といってよい)。

書誌としては、筆者とクロード・マルタンの共著書『ジッド研究書の年代順書誌(1918-2008年)』(本年1月刊)を紹介しておきたい<sup>15)</sup>。同書は、マルタンがすでに単独で2度にわたり公刊していた書誌の増補新版である。1995年刊の第2版での採録数は424、それにたいし新版では784と倍近くまで数値を更新した(95年までに限れば613)。これにはインターネットの飛躍的な進歩によって世界中の図書館蔵書の検索や古書の入手が容易になったことが大きい。新版作成にあたっては、研究書自体の各国語翻訳や別会社による再版も厭わず採録した。この措置によってどの国でどの研究書が重視されたかも把握可能になるからである(ちなみに同一書での再版・翻訳が最も多いのはクラウス・マン『アンドレ・ジッドと現代思想の危機』の8点)。第2版との相対比較でとりわけ新規採録が増えたのは日本や中国、韓国、アルゼンチン、ブラジル、オランダ、旧ユーゴスラビア、トルコ、ギリシアなどで刊行された図書である。我が国にかんしては、数種類の日本語版全集が出版され、早くからジッドが受容・研究されたことは欧米で

も知られているが、具体的な書名や内容となると情報は皆無に近いという状況が長らく続いていた。今回採録した国内出版の図書は、邦訳をふくめ計45点で、全体のおよそ6パーセントを占める。他国の研究者を驚かすに足る数字ではあるまいか。また時期的な面でも1920年代末にはすでに最初のレフェランスが現れ（季刊誌『詩と詩論』のジッド特集号、1929年12月、採録番号23）、ジッドが早くから研究の対象となっていたことを裏付ける。フランス本国の動向にも敏感で、たとえば35年6月にガリマールから刊出の討論会記録『アンドレ・ジッドと現代』にいたっては、なんと5カ月後にはもう邦訳が出ているのである（邦題『アンドレ・ジッドは語る』、向田悌介訳、平原社）。

### 『新フランス評論』関係の出版

『新フランス評論』の歴史にかんしては、オーギュスト・アングレスの大著『アンドレ・ジッドと「新フランス評論」初期グループ』全3巻（1978-86年）を筆頭に、昨秋刊行された党派色の強いヤエル・ダガン『戦争と平和の間の「新フランス評論」』など、すでに10冊ほどが出ているが、出版社主の活動に叙述の力点をおくピエール・アスリーヌ『ガストン・ガリマール』（1986年）をのぞけば、いずれも対象時期を限定した研究であった。これらの成果を踏まえたうえで、同誌創刊前後から第2次世界大戦後までの広い期間をカバーしたのが本年2月に公刊されたアルバン・スリジエの『「新フランス評論」の歴史=物語』である<sup>16)</sup>。著者スリジエは、90年代後半からガリマールの専属として、同社が保有する膨大な史的資料の調査・管理を担当し、すでに共著のかたちで『ガリマールとスイス』（1999年）や展覧会のカタログなど数冊を上梓していたが、本書の執筆にあたっては通常はアクセスが困難な一次資料を渉獵・活用している。エドゥアール・デュコテの『オムパレ宅のヘラクレス』をジッド作と記すなど小さなミスはあるものの（正しくはジッドに献じられた作品）、各時期の重要事項への目配りに遺漏はなく、論述も的確にポイントをおさえて間然するところがない。定期購読者数の推移や単行書の正確な発行部数など「内部資料」にもとづいた情報はとりわけ貴重な貢献である。

しかしながら不満が無いわけではない。その第一は、本書が注をまったく付さず、また書誌も備えていない点である。研究者だけではなく、啓蒙書として広く一般読者層をも想定したためだろうが、その潔さとひきかえに読者の利便性を犠牲にしたところはあるまいか。せっかく豊富な未刊資料に依って情報を提示しても、その出所を示さず追検証の途を予め断ってしまうのはけっして望ましいことではない。またスリジエは事実を確認するさい、「誰々がすでに論証したように」と、研究者の名を引くことがある。たとえば「ジッドとアンドレ・リュイテルスとの友情が『背徳者』生成に果たした役割」や、「ジッド一派と先行誌『フランス評論』との両義的な関係を明証した」ピエール・マッソン（61頁、98頁）、あるいは「ロマン・ロランと『新フランス評論』初期グループとのきわめて複雑な関係を見事に説明した」ベルナール・デュシャトレ（130頁）、など。だが肝心の業績についてはいっさいレフェランスを示さないのである。研究者でさえ、ある程度当該の問題に通じていなければ分からないような曖昧な言及は、付注を排する方針を採るだけに、むしろ学術的であるとの誇りを免れまい<sup>17)</sup>。

その他の出版にも触れておこう——。創刊百周年を記念した選集としてガリマールから次の2点が刊行されている。まず本年1月にはルイ・シュヴァリエの編纂で『「新フランス評論」の目』と題するアンソロジーがフォリオ叢書に入った。ジッドやゲオン、シュランベルジェら共同創刊者に始まり、1987年から96年にかけて編集長を務めたジャック・レダなど最近の作家・批評家までの総勢百人が各時代の代表的作品を論じた文章を並べ、『新フランス評論』の多様性を証する簡便な見取り図を提示している。ついで翌2月は同誌自身が『「新フランス評論」の世紀』と題する特集号を組んだ。アントワヌ・ガリマールの序文につづく本編は3部からなり、アルバン・スリジエ、リュドヴィック・エスカンド、現編集長ミシェル・ブロードーが各部を担当して、「ある長い冒険」（代表的作家7人による9つの抜粋）、「今日の作家たちが先輩作家に答える」（現役作家21人が各々過去の作家ひとりを選び論じた文章）、「世界を通して見たNRF」（マリオ・ヴァルガス・リョサら外国人作家3人による『新フランス評論』にまつわる回想）を編んでいる<sup>18)</sup>。両書にくわえ、2月にはやはりガリマールから、今日では入手難となった『新フランス評論』の2つの「第1号」（1908年11月15日付のそれと、翌年2月1日付の実質的な創刊号）がリプリント版2冊組として書店の棚に並んだ。20世紀文学史においてつとに名高い両号であるが、実際に手にとってみる機会はなかなか得られないだけに、まことに気の利いた企画である。とりわけジッドたちとウージェーヌ・モンフォールとの意見対立の元となった最初の第1号は、同誌の複製版（クラウド・リプリント社製、現在は別会社が在庫を引き継いで販売）には入っていないので、図書館などでの欠号補充にも資するところがある<sup>19)</sup>。

## 展覧会・コロック

最後に『新フランス評論』創刊百周年記念の展覧会やコロックを、本年後半に予定されるものも含めごく簡略に紹介しよう。なお以下の記述は、展覧会のカタログとラジオ放送されたコロックの録音をのぞけば、もっぱら各種のウェブサイトや、筆者が個人的に親交のある研究者たちから得た情報にもとづく。この点をあらかじめ承知されたい。

展覧会としては2つが催され、いずれも美しいカタログが用意された。まずは2月中旬から2カ月半にわたって「ありのまま＝文学尽くし——『新フランス評論』における文学の百年」と銘打った展覧会が、ガリマール出版の全面的協力のもと、世界屈指の稀覯書コレクションを誇るジュネーヴ郊外コロニーのマルタン・ポドメール美術館で開かれた<sup>20)</sup>。大判のカタログにはブロードーとレダが序文を寄せているが、解説を担当するのはここでもスリジエである。ほぼ毎頁を作家たちの写真、書簡や書影などが飾っている。その数は百葉ほどで、「アルバム・プレイアッド」の一冊『「新フランス評論」の一世紀』<sup>21)</sup>ほどは多くないが、いずれもゆったりと組まれており、なかなか見応えがある。また書簡の写真版には全て転写テキストが添えられ参照・引用の便が図られている。なおこの展覧会は、カタログの見返しでは今夏パリに場所を移しての開催が予告されていたが、その後、場所はカン近郊アルデンヌ修道院内の現代出版資料研究所(IMEC)、期間は9月下旬から年末までと変更になった。

これに続いて6月半ばから8月末までシェール県ブルジュのメディアテックで開かれたのが



「ジャック・リヴィエール、『新フランス評論』の操舵手（1909-1925年）」。「カタログは『リヴィエール、アラン＝フルニエ友の会会報』の一冊として発行された<sup>22)</sup>。その構成は「『新フランス評論』の起源」、「リヴィエールと成熟期の『新フランス評論』（1912-1918年）」、「『新フランス評論』の編集長リヴィエール（1919-1925年）」の3部からなり、関係作家らへの適宜の言及とあわせ、若き編集長の懸命の努力を追跡・検証できるように配慮されている。ジッドら年長作家たちの存在感の大きさと自身の夭折とが相俟って、ややもするとその重要な役割が軽視されがちだっただけに、今回の催しが文学運動の主導者リヴィエールの本来あるべき評価に繋がることを願う。なお巻末には300点ほどの展示品の一覧が添えられている。

コロックについて——。最初のコロックは、パスカル・メルシエ、アルバン・スリジエ、ウィリアム・マルクスらをオーガナイザーとして、2月6日フランス国立図書館で開催された「『新フランス評論』百周年」。午前中はメルシエやフランソワ・ショーベ（ポール・デジャルダンが創設した「旬日懇話会」の史的研究で知られる）ら6人が各々『新フランス評論』の多様な側面を分析し、午後に入ってから、3つの分科会がそれぞれ批評、詩および小説にたいする同誌の貢献を語った。論者はアントワヌ・コンパニオン、ドミニック・フェルナンデス、ジャン＝イヴ・タディエ、ミシェル・ジャルティ、ジャック・レダ、ロジェ・グルニエ、ピエール・マッソンら、錚々たる顔ぶれである。これらの議論を受けてミシェル・ブロードーが現編集長の立場から発言し、最後にマルクスが全体の総括を行った。なお以上の模様はすべて録音され、計6時間に及ぶ3回連続のラジオ番組として6月にフランス・キュルチュールで放送されている。

次いで「20世紀前半のフランスおよびヨーロッパの文学における『新フランス評論』の位置」と題する大がかりなコロックが、3月16日からの6日間、南仏ヴァール県トゥールトゥールのデ・トレイユ財団を会場として開催された。ナチス占領のため発行が停止された1943年までを対象時期とするこのコロックでは、アントワヌ・ガリマルの開会の辞を受け、まずはオーガナイザーのひとりペーター・シュニデルが、19世紀末から20世紀初めにかけてジッドが寄稿した数多くの雑誌を通観し、それらが当時の文学環境で占めた位置、また及ぼした影響を検討した。続いてピエール・マッソン、パスカル・フーシェ、クロード・シカールが、それぞれ未刊資料にもとづき3人の共同創刊者（ジッド、シュランベルジェ、コポー）が果たした役割を、またドミニック・フェルナンデスらが『新フランス評論』の3大批評家、ラモン・フェルナンデス、アルベール・チボーデ、バンジャマン・クレミューの貢献を論じた。いっぽうロジェ・グルニエとリュック・フレスは、同誌の周辺にありながらも決定的な影響を及ぼした2人の作家、ラルポーとプーレストの役割を検証している。さらに編集長としてのリヴィエール、ポーラン、ドリュ・ラ・ロシェルにかんする3つの発表、これに続いてはスリジエが、雑誌とそれを母体とする単行書出版部門やガリマル出版との、しばしば軋轢をとまなう複雑な関係を整理し論じた。その他にも前衛文学運動との関係についての発表、アンドレ・ロートら芸術家との協働についての発表などが『新フランス評論』の活動領域の広がり証してみせた。いずれの発表でも質疑応答・討論はきわめて活発であったという。ちなみにこのコロックの報告書は今秋ガリマルから刊行の予定である。

5月8,9日の両日には、ハンガリーのブダペストで「『新フランス評論』と『ニューガット(西洋)』——伝統主義と現代性のはざま」と題するコロックが開催されている。『ニューガット』は1908年にフーゴ・ヴェイゲルスベルグ(筆名イグノートゥス)によって創刊された隔月刊の文学誌で、1941年8月まで発行され現代ハンガリー文学に多大の影響を及ぼした。発行期間がほぼ重なることや編集傾向に近いことから、『新フランス評論』との類縁は以前から指摘されていたが、まとまったかたちでの研究はこれといえるものがなかった。それだけに今回の催しは貴重な貢献である。スリジエとアンジェ大学教授アンヌ＝ラシェル・エルムテをのぞけば、15名の発表者はほとんどがハンガリー人だが、全員がフランス語を使用しての発表。内容は多岐にわたるが、やはり主題目は両雑誌の関係を論じたものである。

上述のリヴィエール展覧会とともにブールジュ市では、6月18日から3日間、「『新フランス評論』、ある神話の誕生」と題するコロックが開かれた(会場は同市自然史博物館)。プログラムは「新しいフランスの評論誌?」と「ヨーロッパの神話『新フランス評論』」の2部構成。15の題目が記載されているが、ここでも登場、まさに大活躍のスリジエ、ポーランド研究者ベルナル・バイヨー、『古典主義と現代性のはざま——ベル・エポックの文学領域における「新フランス評論」』(ロドビ社、2003年)の著者マーイケ・コフィマンを別とすれば、発表者の名はそのいずれもが筆者にはほとんど馴染みがない。浅学を恥じるばかりだが、あるいは若手研究者が中心のコロックなのだろうか。いずれにせよ、早晩出版されるはずの報告書を繙くのが待ち遠しい<sup>23)</sup>。

\*

まさに駆け足での報告であったが、創刊百周年をめぐる現況は概ねカバーしえたと考える。生成研究の面で遅れをとっていたジッド研究はプレイアッド新版などの刊行によってようやく新たな段階へと移行した。ガリマルのNRF記念ウェブサイトや英国シェフィールド大学のジッド研究サイト「ジディアナ」など、インターネット情報の充実にも瞠目すべきものがある<sup>24)</sup>。記念行事にはそれなりに過熱した部分もあるだろうが、40年前のジッド生誕百周年時の出版・行事が今日振り返って見れば爾後の研究にとって一大モメントとなったように、このたびのさまざまな試みも、個々の事例にとどまらず、いずれはひとつの総体として研究史上に確固たる位置を与えられることになろう。

註

- 1) André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*. Édition établie sous la direction de Pierre MASSON avec la collaboration de Jean CLAUDE, Céline DHÉRIN, Alain GOULET, David H. WALKER et Jean-Michel WITTMANN, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, 2 vol., LXII-1521 et XVIII-1425 pp.
- 2) ちなみに、イド・エ・カランド社版『演劇全集』(1947-49年、全8巻)に収録されていた『ハムレッ

- ト』や『アントニーとクレオパトラ』、『審判』（カフカ）、『アマルと王の手紙』（タゴール）など、ジッドによる仏語訳は採られていない。
- 3) この点については以下を参照——Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston : G. K. Hall & Co., 1974, p. 10, n° 28 ; 吉井亮雄「ジッド『パリュード』のプレオリジナル——『ル・クーリエ・ソシアル』と『ルーヴル・ソシアル』——」, 『ステラ』第14号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1995年3月, 99-116頁。ちなみに『日記』プレイアッド新版第1巻の校訂者エリック・マルティが『パリュード』の初出にかんし付した注は明らかに拙論の情報に依拠したものだが、『ルーヴル・ソシアル』については号数を誤って記述している。しかもマルティはその他3つの初出誌には一切言及しておらず, これまた杜撰な付注と断じざるをえない (voir André GIDE, *Journal, I : 1887-1925. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 1403, note 6)。
- 4) 以下の単行研究書がそれである (『サウル』『贖金つかいの日記』) にかんしてはいずれも現在までに出版された唯一の研究書, 『イザベル』にかんしても, あまり上質ではないイタリア語の著書をのぞけば唯一のもの) —— Anne Lapidus LERNER, *Passing the Love of Women. A Study of Gide's « Saül » and its Biblical Roots*, Lanham, MD : University Press of America, 1980, VIII-140 pp. ; Jean LEFEBVRE, « Isabelle » von André Gide oder die Überwindung des verräunlichten Lebens, Essen : Die Blaue Eule, coll. « Frankreich-Studien », 1987, 274 pp. ; René GUISE, *Pour une étude du « Journal des Faux-Monnayeurs » d'André Gide*, Nancy : Université de Nancy II, « Cahiers de l'Institut de Littérature Comparée », s. d. [1972], 92 pp.
- 5) Jean ROYÈRE & André GIDE, *Lettres (1907-1934). « Votre affectueuse insistance »*. Lettres réunies, annotées et présentées par Vincent GOGIBU, S. I. : Éd. du Clown Lyrique, coll. « Les inédits », 2008, 154 pp.
- 6) 採録から漏れている書簡は以下のとおり (各行左から発信者・日付・レフェランス) ——
- G = 01.02.1908 Humanities Research Center, The University of Texas at Austin.
- G = 02.04.1908 Coll. particulière.
- G = 18.06.1912 *La Phalange*, n° 73, 20 juillet 1912, p. II.
- G = 08.05.1918 Bibliothèque de l'Arsenal, Ms. 15.258.
- G = 24.10.1924 Cat. vente Hôtel Drouot, 10-11 décembre 1991, n° 80.
- G = 29.08.1926 *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 29, janvier 1976, p. 58.
- R = 31.05.1927 Archives Catherine Gide.
- R = 23.07.1927 Archives Catherine Gide.
- G = 00.00.1930 *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 103/104, juillet-octobre 1994, pp. 508-509.
- G = 06.04.1932 Coll. particulière.
- G = 13.04.1932 Cat. libr. Stargardt (Marburg), 27 avril 1954, n° 242.
- G = Sans date Coll. particulière.
- 7) André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance 1890-1942*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF » (et coll. « Cahiers André Gide » n° 20), 2009, 1008 pp.
- 8) Voir *ibid.*, Lettre 559 de Valéry à Gide, pp. 863-864 et Annexe D, p. 956. ちなみにこの事実自体は, フォーセットから情報を提供されたミシェル・ジャルティが昨年刊の著書『ポール・ヴァレリー』のなかですでに指摘していた (voir Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris : Fayard, 2008, p. 588, note \*)。
- 9) 稀な事実誤認の例をひとつ指摘しておこう。書簡395の付注が, 1907年1月『カンダウレス王』ベルリン公演 (結局は中止される) のためにジッドが赴いたのは「新劇場 Neues Theater」だとするのは, 通説にしたがったための誤りで, 実際の会場は「小劇場 Kleines Theater」であった。この点については以下の拙論を参照されたい——「〈新劇場〉か, それとも〈小劇場〉か——ジッド『カンドール王』のベルリ

- ン公演をめぐって——」, 『仏文研究』第25号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1994年9月, 137-147頁。
- 10) Catherine GIDE, *Entretiens 2002-2003*. Avec Jean-Pierre Prévost, Jean-Claude Perrier, Dominique Iseli et Jérôme Chenu, suivi d'un entretien avec Isabelle Bowden et de lettres inédites relatives à ma naissance. Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », 2009, 160 pp.
  - 11) Martine SAGAERT - Peter SCHNYDER, *André Gide. L'écriture vive*, Pessac : Presses Universitaires de Bordeaux, coll. « Horizons génétiques », 2008, 167 pp. [Accompagné d'un DVD-Rom qui reproduit près de 500 documents manuscrits et iconographiques.]
  - 12) *Édition génétique des « Caves du Vatican » d'André Gide*. Édition d'Alain GOULET. Réalisation éditoriale de Pascal MERCIER, Sheffield : André Gide Editions Project, Université de Sheffield / Paris : Gallimard, 2001, 1 CD-Rom dans coffret.
  - 13) *Le Magazine littéraire*, n° 484, mars 2009, pp. 68-86 : « Gide, le plus moderne des classiques ».
  - 14) Alan SHERIDAN, *André Gide. A Life in the Present*, Londres : Hamish Hamilton, 1998, XX-709 pp. + 16 pp. ill. h.-t.
  - 15) Claude MARTIN - Akio YOSHII, *Bibliographie chronologique des livres consacrés à André Gide (1918-2008)*, Lyon : Centre d'Études Gidiennes, 2009, 140 pp.
  - 16) Alban CERISIER, *Une histoire de « La NRF »*, Paris : Gallimard, 2009, 624 pp.
  - 17) 参考までに具体的なレフェランスを示すと——Pierre MASSON, « Merlin et le Juif errant », introduction à la *Correspondance André Gide - André Ruyters*, édition établie, présentée et annotée par Claude MARTIN et Victor MARTIN-SCHMETS, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1990, t. I, pp. XXIX-LV ; id., « La (Nouvelle) Revue Française. Interrogations sur l'origine d'un titre », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 119-120, juillet-octobre 1998, pp. 385-395 ; Bernard DUCHATELET, *Romain Rolland et la NRF*, Paris : Éd. Albin Michel, coll. « Cahiers Romain Rolland » n° 27, 1989, 367 pp.
  - 18) 上記2冊のレフェランスは以下のとおり——*L'Œil de la NRF. Cent livres pour un siècle*. Choix des textes et présentation par Louis CHEVALIER, Paris : Gallimard, coll. « Folio », 2009, 352 pp. ; *La Nouvelle Revue Française*, n° 588, février 2009 : *Le Siècle de la « NRF »*, 400 pp.
  - 19) さらに付言すれば以下の索引が近刊の予定である——Claude MARTIN, *Table et index de « La Nouvelle Revue Française », 1908-1943*, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », 2009.
  - 20) *En toutes lettres... Cent ans de littérature à la Nouvelle Revue Française*. Avant-propos de Michel BRAUDEAU et Jacques RÉDA. [Documents commentés par Alban CERISIER,] Paris : Gallimard, 2009, 112 pp.
  - 21) *Un siècle NRF*. Iconographie choisie et commentée par François NOURISSIER, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade » (*Album de la Pléiade*, n° 39), 2000, 376 pp.
  - 22) *Jacques Rivière, l'homme de barre de « La Nouvelle Revue Française » 1909-1925*, *Bulletin des Amis de Jacques Rivière et d'Alain-Fournier*, n° 122, 2<sup>e</sup> semestre 2009 [juin 2009], 136 pp.
  - 23) ちなみに上述の展覧会「ありのまま＝文学尽くし——『新フランス評論』における文学の百年」と並行して、12月11-12日には現代出版資料研究所で「『新フランス評論』の百年」と題するコロックが予定されているが、本稿執筆時点ではまだ具体的なプログラムは発表されていない。
  - 24) ウェブサイトのURLは今後変更される場合もありうるのでここには記載しない。Centenaire de la NRF や Gidianaなどをキーワードとして各自検索されたい。